

I am much indebted to Dr. H. Ohba, University Museum, University of Tokyo, for invaluable advice and critical reading of the manuscript. I wish to express my deep gratitude to Dr. S.B. Malla, Director General, Department of Medicinal Plants, Kathmandu, Nepal, for providing me facilities for the research of Nepal plants. I express my thanks to Miss Tomoko Yamashita for necessary help in SEM research in University Museum, University of Tokyo.

References

- Hara, H. 1965. New or noteworthy flowering plants from Eastern Himalaya (4). Journ. Jap. Bot. 40: 97-103. — 1975. Balsaminaceae. In H. Ohashi, Fl. E. Himal. 3rd rep., 78-80. Hooker, J.D. 1875. *Impatiens*. In Fl. Brit. Ind. 1: 440-483. — 1905. An epitome of the British Indian species of *Impatiens* pt. 2. Rec. Bot. Surv. Ind. 4: 11-35.

* * * *

ツリフネソウ属はヒマラヤで多様化した属の1つである。1983年および85年のネパールにおける東京大学の調査で採集された標本を調べたところ、今までシッキムからの報告しかなかった *Impatiens Pradhani* Hara がネパールにも分布しており、しかも栄養器官および花部の形態では *I. bicornuta* Wall. と区別できないほど近似していることがわかった。しかし、*I. Pradhani* の花は黄色で花弁に赤紫色または赤茶色の斑点があるのに対し、*I. bicornuta* の花は淡紅紫色で濃紅紫色の斑点があり、しかも、この両種は同所的に生育していることはない点が注目される。また、ネパールから *I. bicornuta* によく似た新植物が見いだされた。この植物は、下萼片(唇弁)の形が、*I. bicornuta* とは異なる。なお、*I. bicornuta* の変種として記載された var. *micrantha* Hara は、この植物と同じ形の下萼片を有していることが判明した。したがって、この植物と var. *micranth* を同種として、*I. bicornuta* とは別種とするのが適当と考えられたので、**I. Harai** として記載した。

○ミヤコグサ属の新外来品について (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: *Lotus subbiflorus* Lag. newly naturalized to Japan

我国に帰化したミヤコグサ属 *Lotus* の植物については、既に大橋・立石両氏によって詳細に検討、報告(植研 49: 73, 1974)されている。ところで最近、この仲間の新しい侵入品が確認されたので記録しておきたい。その概形を記せば、次のようなもので

ある (Fig. 1)。

一年草で基部より分岐し、多少直立するも横臥し 20 cm 内外に伸長する。全株白色の長い開出粗毛を密生するが、特に上部で著しい。葉は互生し卵状披針形を呈する 5 小葉よりなり、全縁でやや尖頭をなし 6~7 mm 許。6~7 月頃に各葉腋より長柄を伸ばし、先端に 2(~4) 個の濃黄色で 7 mm ばかりの蝶形花をつける。萼は 4 mm ばかりで 5 深裂し、各裂片は狭長で萼筒とはほぼ等長。豆果は無毛平滑、長さ 8~10 mm ばかりで、ずんぐりとした棍棒状を呈し、通常 2 個を下垂してつける (Fig. 2)。種子は無毛で褐色を呈し、7 個内外を容れる。

以上のように本種は従来、我国に帰化している諸品よりも小形で、全株白長毛に被われ、しかも一年草で、短い豆果を有する点だけでも容易に区別できる。

これを筆者は Dwarf hairy bird's foot trefoil の英名を有する *Lotus subbiflorus* Lagasca (1805); Tutin et al., Fl. Europ. 2: 175 (1968); Garrard & Streeter, Wild Flowers Brit. Isles, 237, t. 75 (1983)—*L. hispidus* Desfontaines ex De Candolle (1815); Ross-Craig, Draw. Brit. Pl. VII, t. 47 (1967); Butcher, New Illust. Brit. Fl. 1: 609 (1961) と同定した。本種は元来、ヨーロッパ南西部地方に分布し、主に沿海地の向陽草地などを中心に生育する由である。

ところで今回のものは、長年にわたって香川県下の帰化植物調査に携っておられる和気俊郎氏らのグループが、丸亀市蓬萊町で 1985 年 6 月に見出し、筆者に同定を求められたものである。従来から外来品の確実な同定を行うには、可能な限り乾燥標本によらず、生品に基づくべきことを提唱している筆者の希望を容れて、同氏は今回も極めて良好な状態のものを送付されたの

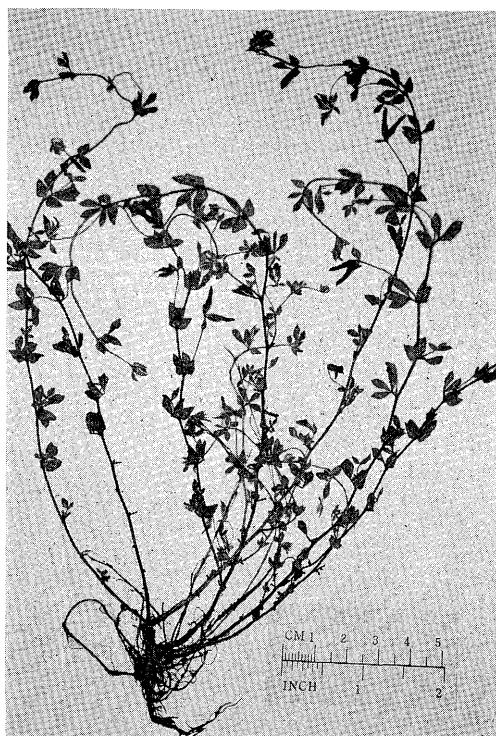


Fig. 1. *Lotus subbiflorus* Lag. collected by Mr. T. Wake in Marugame City, N. Shikoku on June, 1986.

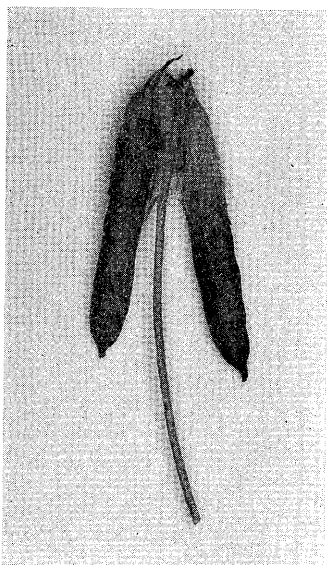


Fig. 2. Pods of *Lotus subbiflorus* Lag.

で、十分な検討を行うことが出来た。同氏からの書信によれば、恐らく同地(港)に輸入された木材に随伴し、侵入したのではないかと推察されている。なお本種と同一場所には、シャグマハギ、ハリエンシダ、アカツメクサのほか、同属のネビキミヤコグサやワタリミヤコグサなどの各種のマメ科を主体とした外来品が、大群落をなしている由である。しかし本種は一年草であり、しかも小形であるため、本属の他の渡来品と異なり、はたして今後定着するか否か疑問で、いわゆる temporarily naturalized plants の範疇に止る可能性がある。

因みにその後、現地で観察を続けておられる和気俊郎、赤木綯子氏らからの書信によれば、今年(1987)も引続き個体数は少ないが、同地域に生育が確認されたとのことであるので、今後存続することも考えられる。また、やはりヨーロッパ原産で、既にアメリカ合衆国の西海岸(California 地方)

にも帰化しているとされる本種に近似の *Lotus angustissimus* L. は、着花数が少なく(1~2個)、しかも花梗が葉よりも短いこと、また豆果がより細長く(15~20 mm 許)、したがって種子の数も多いこと、などにより区別できる。

なお、本種は我国で記録されている本属の既知種よりも小さく、また顕著な白軟毛に覆われることなどから、当初、ヒメミヤコグサやケミヤコグサと仮称しておいた。しかし前者の名が既に一部の山草家によって、別の植物に使われていることを考慮し、これとの混乱を避けるため、改めてセイヨウヒメミヤコグサ(セイヨウケミヤコグサ)なる名を、本種の標準和名として提唱することとしたい。

終わりに興味ある資料を提供され、検討の機会を与えられた和気俊郎氏を始めとする関係者各位、ならびに種々御教示、御援助戴いた故原寛博士および小山鐵夫博士に対し、衷心より感謝の意を表する次第である。

Lotus subbiflorus Lag., a dwarf hairy bean of European origin, has been naturalized to Japan as an alien weed. In June of 1985, the plants were found in a sunny grassy spot of Horaicho, Marugame City, Kagawa Pref., N. Shikoku, western Japan. The weed may have probably been introduced from Europe mixed up with imported timbers from the same regions. (東京歯科大学)